
世界は君のために

朱希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は君のために

【Nコード】

N0612X

【作者名】

朱希

【あらすじ】

一年に一度見る夢。それはその日一日の悪夢の始まりでもあった。しかし、今年もその夢を見た優衣に訪れたのは悪夢でもなんでもない、異世界の王子様だった。

『約束だ。僕が結婚できるようになったら、必ず、迎えに行く。』

その笑顔はとても眩しくて、けどとても悲しい笑顔だった。

世界は君のために 0

p i p p i p p i

目覚ましの音に驚き目を覚ますとなんと7時にセットしておいたはずの目覚ましが8時だった。

そして夢を思い出す。

そうか、年に一度の悪夢の日がやってきたのか・・・

急いで下に下りると母親が元気に起きていた。

「優衣ちゃんおはよう」

につこり笑顔のお母さんに殺意が沸いてもいいはずだ。いや、自分で起きなければならないのだけれども・・・

「お母さん！！何で起こしてくれなかったのさ！！」

「あらあ、お母さん起こしたわよ？」

「聞こえなかったよ！！悪夢なんて見るんじゃないよ！なかったー！！！！」
お母さんに逆切れしながら朝ごはんを口に入れる。

ご飯が喉に詰まりそうになりながらも、2階へ上がり制服に着替え、荷物を持って玄関を開け家を飛び出す。

くそ！全部あの夢のせいだ！！！！

走りながら夢を回想する。

「そっか。今日はクレバー様の…」

まさかお母さんがこんなことを呟いていたなんて思いもよらなかった。

あの夢は物心付いた時から年に一度この時期に見る夢だった。

幼い自分と知らない外国人みたいな男の子が出てきて少しだけ話をする。

そして最後に結婚を申し込んでくるのだ。

あんな男の子に会ったことあったっけ？と思うのだが、そんなことが問題ではない。

あの夢を見るとその次の日色々ついていない日になる。

初めて見た幼少時代には雨で水たまりができたところに車が通り私をびしょぬれにさせた。

ある年には階段から落ちた。起きたら病院だった。

本当にこの夢は、私を殺す気か！！！！

今回も目覚ましが鳴らないし、しかもみる。

いつの間にか犬の糞を踏んでいる。なぜ？！

今日もいろいろと覚悟をしとかなければならないとため息をつくと高校へ向かった。

「…はあ。」

はつきり言おう。今回のついてなさは異常だ。
どうあがいてもやはり遅刻は遅刻だった。

そして昨日確かに今日の曜日の準備をしたはずだ。
しかし何故か違う教科のものばかり入れている。

体育の時間にはボールが当たり即保健室行き。

帰りには鉢植えが真上から落ちてきて危うく、本当に死ぬかと思っ
た。

げっそりしながら家に帰る。

やっとほっとできる。やっと今日が終わる。

「ただいまー」

「おかえり、僕の可愛いユイ。」

ウキウキしながらドアを開けるといかにも王子様という格好をした
男がいかにも王子様だと言うオーラをまとい私を迎えた。

一度玄関の戸を閉め再び開ける。やはりやつはいた。

「えっと…誰？」

思わず言ってしまうてもいいだろう。はつきり言ってこんなキチガ
イ男知らない。

現代の日本でこんな恰好するやつなんている…？少なくとも私の知
り合いにはいない。

髪の毛も金髪だが、こんな染めている奴なんて近くにいないし外国
人も残念ながら知り合いにいない。

とにかく初対面のはずだ。

なのにどうして私の名を知っていて、私の家で私を迎えるの？

頭の中はパニック状態だが王子様（仮）はにこにこ私に中へ入る
ように促す。

いや、ここ私の家だから。

リビングへ行くとお母さんが座っていた。

「お母さん！！！」

あんなへんてこお母さんでも家族だから安心できる。
ついつい抱きしめてしまった。

何なのこのキチガイ男！！早くどこかやってよ！！

目で訴えるがお母さんには全く通じていないのかニコニコしている
だけだった。

「優衣ちゃんおかえりなさい！待ってたのよ？さあ、陛下もどうぞ」
「ありがとう」

やつは私が座った隣の席に座った。

ん？陛下？

隣を瞬時に見るとやつは先ほどと同じようにニコニコと笑顔だった。

「ユイ、どうしたの？」

「陛下って…？」

眉をひそめその陛下とやらに質問する。するとお母さんがティーセ
ットを持って現れた。

「あらあ、陛下のこと覚えてないの？あれだけ求婚されていたじゃ
ない。」

「は？」

知らないんだけどこんな男。

ますます眉をひそめると私の顔色なんて全く気にしていないのか陛
下の笑顔がさらに明るくなる。

「やつと迎えにこれた。さあユイ、結婚しよう。」

やつが私の手を救うと手の甲にキスを送った。

なっなんてことを…！！！！

思わずガバツと手を払う。

「なっなにすんのよ！！！！突然…！！大体私あなたの事知らないっ
！！！！」

「まあ、優衣ちゃん。」

「キサラギ嬢、あまりユイを責めないでやってくれ。迎えに行けな
かった俺が悪いんだから」

悲しそうな顔でそう言つとさらに私の方へ近づいてくる。いや、近づきすぎ…

「ユイ、俺はサルバハート王国の王、クレバーⅡギルティア…サルバハートだ。」

え、なに途中の…（てんでんてん）そして何その王国名。初めて聞いたんだけど

「ユイを迎えに来た。俺と結婚してください。」

再び私の手を取り優しく唇を落とす彼。

この言葉に頭が真っ白になりながらふと朝の夢を思い出した。

『約束だ。僕が結婚できるようになったら、必ず、迎えに行く。』

え、

も、もしかして夢の中のやつって…!!?

01（後書き）

新連載です。よろしくおねがいします。

活動報告にて募集をかけております。もしよろしければ参加いただければと思います。

「ユイを迎えに来た。俺と結婚してください。」

ちよつと待つてちよつと待つて…

意味がわからないんだけど、わけがわからないんだけど、

「お、お母さん」

「優衣ちゃんやっぱ覚えていなかったのね。結婚印を封印した仲なの。」

ぐずぐずと泣きまねをするお母さんに呆然とする。

結婚印…！？なにそれ！？

「昔首筋に変なほくろできたって言ってたでしょ？それが結婚印よ。」

とつさに首筋を触る。

これが結婚印だったのかー！！

つてこんなことしたの全く覚えてないんだけど！！

「それよりも優衣ちゃん実はね…」

久しぶりにお母さんの真剣な顔を見たかと思うと突然家中に地震のような揺れが起こり始めた。

「なつなにこれ！？」

必死にお母さんにしがみつくがお母さんはにっこりと笑うと私を某陛下に差し出す。

すると後ろから足音が聞こえてきた。

「陛下、キサラギ嬢。もうお時間かと。」

「ああ。」

「わかつてるわ。」

なんの話？わけがわからないとお母さんと某陛下の方を行ったり来たり見渡しているとお母さんが突然私のおでこにキスをする。

「お母さん！？」

「この国での結婚印は必ず結ばれなきゃならない”運命”になる。だから優衣ちゃん、あなたは行かなければならない。」

「なんでっ」

なんでお母さんがそんなこと知ってるの！？

「優衣ちゃん、ずっとあなたに謝らなければならなかったの。」

「おかあ、さん…？」

「ママはね、この世界の住人じゃないの。違う国の住人。今はクレバー様が治めているサルバハートの人間なのよ。サルバハートからの逃亡者。」

何を言っているのか全く分からなかった。

「私はもう行くことができない。私には呪いがかけられているから。今まではクレバー様の魔力で守られていたけれど、また逃げなければならぬ。けどね、優衣ちゃん、あなたはあの国に祝福されている。だから大丈夫。」

再びおでこにキスをされる。しかし目の前が涙で全く見えなかった。そしてお母さんがいつも肌身離さず持っていたペンダントを私の首にかけた。

「優衣、あなたにだけは幸せになって欲しい。そのペンダントが壊れない限り、私はずっと生き続ける。あなたは必ず生き続けることができる。」

ふわっとお母さんの体が宙に浮かぶ。

待って、私

「大好き、ずっと、ずっと。大好きよ。」

その瞬間に私の視界からお母さんはいなくなった。

「ユイ」

陛下が私を支えてくれるが涙が止まらなかった。

「陛下。 私たちもそろそろ。」

「・・・ああ。 ユイ、 私たちもそろそろ行かなければならない。
しかし私は首を振る。 いやだ、 嫌だよ。」

「おかあさんといっしょに、 いきたい。」

あんな変な人でも私の大好きなお母さんなのだ。

突然見知らぬ土地に連れていかれるなんて御免だった。

「だめだ。 この運命は逃れられない。 ユイ、 一緒に行ってくれ。
でない」と

突然自分の体がふわっと浮かびあがった。

どういうこと!?

陛下が必死に私の方へ手をのばしてくる。
しかし

「いやだ!!!」

陛下の手を振り払う。

するとさらなる浮遊感を感じる。

そして光の中へ消えて行つた。

『陛下、本当に、よろしいのですか？』

『僕はユイの事を愛している。その覚悟はできている。』

『あいしている？』

『ああ、僕はユイの事を愛している』

―し、もし？
何？

目をうつすらと開けるとり。人形が私の目の前で浮いていた。
え？り。ちゃん人形が私の目の前をういている…！？

「ぎゃああああ…！！！！」

どどどと言つこと！？

後ろには普通の…いや、とても可愛い女の子が立っていた。

「あ、あのこれっこの人形……!!!」

【人形！？違いますっ！私は精霊のヴィレですっ！】

「喋った……!!!」

もう呆然とするしかない。精霊ってあんた……まじで？

確かに目の前で小人が宙に浮かれると納得せざるを得ない気もする。

【ろい様あゝ】

うるうると精霊は後ろの女の子の方へ向かう。

「突然行くからびっくりしてしまったのよ。えっと、大丈夫でしょうか？」

「は、はい。」

「よかったです。先ほどあちらのベンチで読書をしていたらヴィレが突然倒れている女性を見つけたと言ってくるものだから駆けつけたのです。今いる場所は私のおうちです。」

「ごめんなさい……」

そして私は今まで起こったことを思い出した。

私、光の中に吸い込まれて、そして……

「あっあのっ……!!!」

「はい？」

「ここはどこですか!?!」

「どこ？サイーユ地区の……」

「地区じゃなくて国!」

「国は……サルバハートです。」

「!?!」

やっぱり来てしまっていたのだ。

「あの……」

「サルバハートだあ……？知らないよ。そんなの。私を帰してよ……」
へたりと崩れると女の子が私の体をぎゅっと抱きしめてくれた。

「その、昔よく母にこうしてもらっていたんです。そしたら、安心できたから。」

「うっ……」

そして私は泣いた。
今までに起こったことへの苛立ち、これからへの不安。
全部全部詰まった涙だった。

「落ち着きましたか？」

「うん。」

目をこしこしとこするとふと我に返る。

「ごっごめん！！見ず知らずの人なのにこんな看病なんかしてくれちゃって、ほんと、つかあれ？なんで言葉通じてるの？」

一人で勝手にしゃべっていると女の子がくすくすと笑い始めた。
恥ずかしい。

「すいません。あなたのような元気な方を見たのは初めてで……」

「ごめん、迷惑だったよね。」

「いいえ迷惑だなんてとんでもないです。私も久しぶりに同年代の方とお話できてとても楽しい思いをさせていただきました。」

【ヴィレもっ おねーさんのアクアが凄く気持ちが良いから元気出しました！】

アクア？よくわからないんだけど。

「けど申し訳ないな……あ、そうだ！できることがあれば何かするよ！」

「いいえ、そんな、」

すると突然彼女はうつむいた。

「こんなに楽しい思いをさせていただいただけで十分です。」

「じゃっじゃあわかった！いっぱいおしゃべりしよう！」

私はとても一生懸命だった。

ただただ、この子を悲しませなくなかったのだ。

「あなたが寂しい時、つまらない時、おしゃべりに来る！どうかな？」

はははと苦笑いすると彼女の目から涙があふれた。

「えっごめん！うざかったかな！？」

「いいえっ…嬉しいのです。私こんなこと言われたの初めてで…家が下級貴族だからずっといじめられていて、だから、学校にも行けなくて」

「え？」

「だからこんな風に接してもらったの初めてで…」

いつの間にか今度は私が彼女を抱きしめていた。

「よし、じゃあおしゃべりいっっぱいした後はそいつらをやっつけに行こう。だから、大丈夫。」

「・・・はいっ」

「あっそう言えばお世話になってるのに名前言ってないね。」

「そういえば。」

二人でくすくすと笑う。

「私ユイって言います。キサラギ…あ、こっちでは逆かな？ユイ・キサラギ」

「ユイ、ですね。私はロイ・ストラクスです。」

そしてお互いに握手をした。

お母さん、なんでかわかんないけど、とりあえずこの国にきちちゃったよ。

某陛下に会う前に友達が出来ちゃった。

これからどうなるかわからないけど、少しだけこの国の優しさに触れたよ。

まだ納得できていないけれど、それでも今自分がいる場所を少しだけ理解した気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0612x/>

世界は君のために

2011年11月15日12時06分発行